

新版

神の鑿



1

たくまよしみつ

■新版・神の鑿

◆はじめに

小松利平（理兵衛布弘）～小松寅吉（布孝）～小林和平……と、江戸末期から昭和まで3代続いた石工の物語を紹介した拙著『神の鑿』は、私家版ながら多くのかたがたからご支援を受け、第4版（2006年9月刊行）まで作った。

その第4版も在庫がなくなり、新版を、と思っていたのだが、ファイルを保存してあったハードディスクが壊れてしまい、加筆・訂正することができなくなってしまった。

これもひとつの「啓示」かもしれないと思い、今回の新版は頭からまったく書き下ろすことにした。

どうせ書き下ろすのなら、今まで以上に大胆な推理も入れて、時代を追っていく読み物にしようと思う。

そんなわけで、この「新版」は、第4版以降に分かった事実を加えながらも、推測部分は、より大胆なドラマ仕立てになっている。

その点をご了承の上で、お楽しみいただければ幸いである。



◆天才肌の高遠石工・小松利平布弘

日本の石造物を研究する上で「高遠石工」の存在を無視することはできない。

江戸時代、高遠藩（信濃国、現在の長野県南部に存在した藩）出身の石工たちが、全国で高い技術を駆使した仕事をしたことで「高遠石工」は有名になった。

高遠という地名は、現在、長野県伊那市高遠町として残っている。2006年に市町村合併して伊那市に併合されるまでは、長野県上伊那郡高遠町だった。

高遠石工が隣国の甲斐などに進出していったのは1600年代半ばくらい。1700年代には、すでに「高遠石工」は全国レベルのブランドとして確立していたようだ。（参考『再発見！高遠石工』笹本正治・監修、長野県高遠町教育委員会・編集）

このように、高遠石工の歴史は古いが、本書で紹介する石工の物語は、そこまでは遡らない。

静岡県静岡市小河内（旧清水市）の勝軍地蔵祠には、「延享3（1746）年1月 高遠 小松利右衛門」という銘が残っている。1700年代半ばに、高遠石工の小松利右衛門が清水までやってきて仕事をしたという証拠である。

この小松利右衛門（1730～1790）の次の代が小松理兵衛布孝（1762～1836）、さらに次の代が小松利平（1894～1888）と続くが、本書で扱う「天才石工三代記」ともいえるドラマは、この小松利平から始まる。

利平が生まれた当時、高遠藩は3万3千石の貧乏藩だった。藩主は第7代（高遠藩内藤家12代）の内藤頼寧。

内藤氏は、藩の財政の一助とするため、農業収益が望めない山間部、藤沢郷や入野谷郷などの農家に対し、次男以下の男子に石切の技術を習得させ、「旅石工」として全国各地に出稼ぎに生

かせる政策を続けていた。

それ以前から「高遠石工」は全国に知られるブランドだったが、藩の積極策も後押しして、さらに日本中に高遠石工が散らばっていくことになった。

石工たちは稼ぎの一部を「運上金」として藩に持ち帰って納めることを課せられていたが、交通手段のない時代、何百キロもの道のりを、重い石工の道具を携えて徒歩で戻っていくのは大変なことだった。出稼ぎ先にそのまま定住し、家庭を持つ石工が後を絶たなかったが、そうした脱藩者を取り締まり、連れ戻すために、藩では「石切目付」という監視役をもうけていた。

高遠石工の主たる仕事は、土木工事の際の石組み作業だったが、石仏などの石細工に生き甲斐を見出す、アーティスト志向の石工もいた。340体以上の石仏を残した守屋貞治（1765～1832年）とその弟子・渋谷藤兵衛。東濃路に流れていき、東白川村に住み着いた伊東傳藏。越後に流れ、六日町周辺に多数の石仏や石塔を残した太良兵衛などが知られているが、小松利平という石工についての記録は、ほとんど残っていない。

利平は文化元（1804）年11月、高遠石工として実績のあった小松家に生まれ、石工としての修業を積んだ後、旅石工として藩を出る。

利平がどういう経緯で奥州まで流れてきたのかは分からない。最終的には、現在の福島県石川郡浅川町福貴作という集落に住み着く。その理由の一つは、この地が「福貴作石」と呼ばれる、細工のしやすい良質な石を産出したことにあっただろう。福貴作石は、きめが細かく細工がしやすいと同時に、摩耗しにくいという、相反する性質を持つ石だった。

利平が福貴作に工房を構え、この地に永住を決意したのは、江戸時代天保年間前後のことであったと思われる。

故郷から遠く離れた東北の地とはいえ、石切目付にいつ発見され、連れ戻されるか分からない。そのため、この地で石工をした生涯にわたり、利平は自分の名前を作品に刻むことはしなかった。

利平が彫り上げた石彫刻作品を特定することは難しいが、いくつか、利平の作であろうと推定できるものがある。

可能性が高い順に紹介すれば、まずは、沢井八幡神社（石川郡石川町沢井*）にある波乗り兎像だ。

「天保14癸卯（1843）年8月15日 奉納 角田定右衛門」と刻まれている。

角田家の戸籍を調べてみると、定右衛門は天保14年に生まれている。つまり、この波乗り兎像は、定右衛門の親が、生まれた赤ん坊の健康を願って、赤ん坊の名前で奉納したものと考えられる。天保14年は兎年。その中秋の名月（8月15日）に、子供の健康と発展を願って、おめでたい波乗り兎像を彫らせたのだ。

石工の名前は刻まれていないが、この定右衛門は後に長福院毘沙門天像（大正2＝1913年建立）の筆頭奉納者になっている。その長福院毘沙門天像を彫ったのは小松利平の弟子・寅吉と、寅吉の一番弟子・小林和平である。そのことから考えても、この波乗り兎像は利平の工房で彫られたものに間違いはないだろう。

兎の石像自体は珍しいものではなく、兎を神使とした月読神社などでよく目にする。しかし、

それらはすべて、耳を背中にピッタリとくっつけた形で彫られており、両耳をピンと立てた像はまずない。

この沢井八幡神社*の波乗り兎像は、両耳をピンと立てた兎像として、他に類を見ないものだ。兎の細く長い耳を石から彫り出すことは至難の業で、よほど腕がよくないとできない。

残念ながら、この兎像の耳は、現在ではすべて折れてしまっていて、取れた耳が1本残っているだけだ。子供が馬乗りになって遊んで折ってしまったものだが、耳が立っていたときの姿を想像すると、この像がいかに貴重なものか実感できる。

このような兎の石像が江戸時代に彫られていたという記録は、日本国中探しても他に見つけることができない。

その波乗り兎像のすぐ前には、慶應元（1865）年建立の狛犬がある。台座には「願主石工菅田庄七」と彫られているが、この菅田庄七は台座石組みを専門とする石工で、石彫刻はしないとのこと。

となると、この狛犬本体を刻んだのも、やはり利平の工房だと思われる。

(*沢井村は明治27年に3村が合併して「沢田村」に。沢田村は、昭和30年に1町5村が合併して現在の石川町になった。本書では「旧沢田村村社八幡神社」を便宜上「沢井八幡神社」と記す)

利平の作ではないかと推定されるものの中で最高傑作は、八槻都都古和気神社（東白川郡棚倉町八槻）の狛犬である。

天保の大飢饉がようやく終わった天保11（1840）年の建立だ。多くの奉納者、関係者の名前が台座に刻まれており、今でも鮮明に読み取れるが、なぜか石工の名前だけが彫られていない。わざと彫らなかつたとしたか考えられない。

この狛犬は、阿像と吽像がまったく違う顔をしており、そのどちらもが、江戸、浪花、出雲など、当時定着しつつあったいくつかの狛犬の「型」にあてはめられないユニークなものだ。

高遠石工は多くの石造物を全国に残しているが、狛犬は非常に少ない。その少ない狛犬の作例を見ると、共通点がほとんど見られず、どれもが個性的な風貌をしている。旅石工として全国を渡り歩いた高遠石工たちは、江戸風、浪花風といった定型にこだわらず、狛犬を自分たち独自の解釈と美学で彫ったのだろうか。

その中でも、八槻都都古和気神社の狛犬は最高傑作と言えるだろう。

その他、推定の域を出ないが、利平の工房で制作した可能性を感じさせる作品としては、旭宮神社（須賀川市）の狛犬（建立年不明）、烏峠稻荷神社（白河市）の狛犬（万延2＝1861年）などがある。

いずれも定型に縛られない自由な作風で、利平の作であるとすれば、小松利平という石工が自由闊達な精神の持ち主であったことがうかがえる。

利平は福貴作の地で新たな「石工小松家」を築き上げることを決意すると同時に、生涯、自分の出自や正体を隠し続けた。高遠藩の石切目付の手がここまで迫ってきて、自分の次の代が続かなくなることを恐れたのだろう。結果として、石工・小松利平の名前を知る人はほとんどいないし、作品も特定できない。

小松家に残る系譜を見ると、

- 利右衛門 享保14（1729）年？～寛政2（1790）年8月14日（享年61歳）
- 理兵衛布高（布孝） 宝暦12（1762）年？～天保7（1836）年6月18日（享年75歳）
- 利平（理兵衛布弘） 文化元（1804）年11月晦日～明治21（1888）年8月1日（享年85歳）
- 彦蔵 天保8（1837）年8月3日～明治33（1899）年6月25日（享年63歳）
- 寅吉（布孝） 弘化元（1844）年6月6日～大正4（1915）年2月22日（享年72歳）
- 亀之助（布行） 明治9（1876）年10月2日～昭和18（1943）年7月26日（享年68歳）

……と続いている。しかし、小松家墓地にある墓碑銘石碑には、利平の名前がない。自分の名前を記録するな、という、利平の遺言があったのかもしれない。

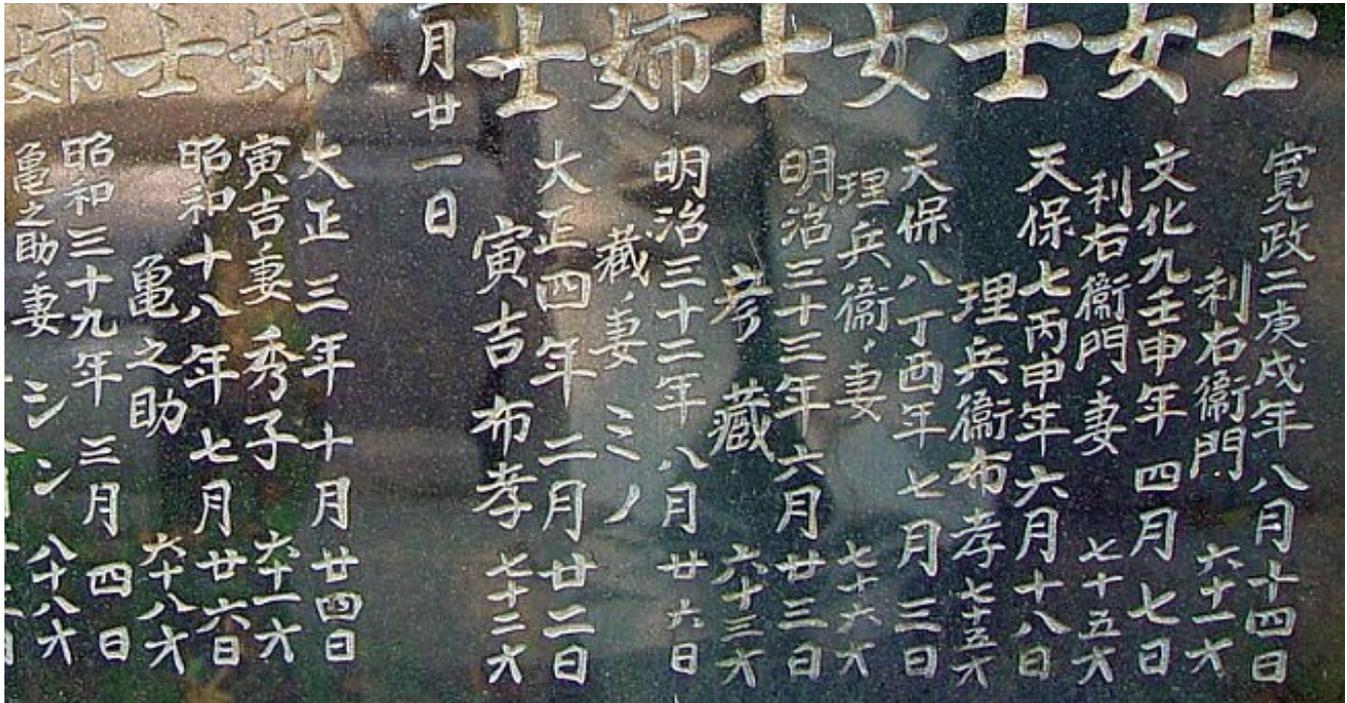
その代わりに、利平のものと思われる単独の小さな墓がある。そこには「小松理兵衛布弘」と刻まれている。

利平は死んだ後にも「利平」の名前を隠そうとしたのか、あるいは、死後に先代の名前「理兵衛」を継いだことにしたのだろう。

利平は自分の名前を残すことより、誰からも縛られることなく、自由に石を刻む生涯を選んだ。

そして、その創造精神と高度な技術は、故郷の高遠を遠く離れた阿武隈山系の地で、弟子たちに見事に引き継がれていったのである。

小松家の墓にある系図



小松 利右衛門 享保14（1729）年？～寛政2庚戌（1790）年8月14日（享年61歳）

↓

小松 理兵衛布高（布孝） 宝暦12（1762）年？～天保7丙申（1836）年6月18日（享年75歳）

↓

小松 利平（理兵衛布弘） 文化元（1804）年11月晦日～明治21戊子（1888）年8月1日（享年85歳）

↓

小松 彦蔵 天保8（1837）年8月3日～明治33（1899）年6月25日（享年63歳）

↓（養子縁組）

小松 寅吉（布孝） 弘化元（1844）年6月6日～大正4（1915）年2月22日（享年72歳）

↓

小松 亀之助（布行） 明治9（1876）年10月2日～昭和18（1943）年7月26日（享年68歳）

.....と続くが、なぜか小松家の墓にある系譜を刻んだ石碑に利平の名前がない。自分の名前を記録するな、という、利平の遺言があったのかもしれない。

その代わり、利平のものと思われる単独の小さな墓がある。そこには「理兵衛布弘」と刻まれており、「利平」の名前を隠したか、あるいは、死後に先代の名前「理兵衛」を継いだということにしたのだろう。



小松利右衛門の墓 高遠入谷.....という出生地が読める



理兵衛の墓 「理兵衛布弘」と刻まれている



利平の先代、理兵衛布孝の墓 墓には「布高」と刻まれている



↑八槻都都古和気神社の狛犬（天保11年） 阿像



↑八槻都都古和気神社の狛犬 吽像



↑阿像の顔



↑吽像の顔



口の中の歯をここまで丹念に彫っているのは、江戸時代の作品には珍しい



↑阿像

を横から見る。耳が特徴的で、エスニックなテイストを漂わせている



↑吽像を横から見る。子獅子が甘えている様子がこの時代の狛犬としては珍しい



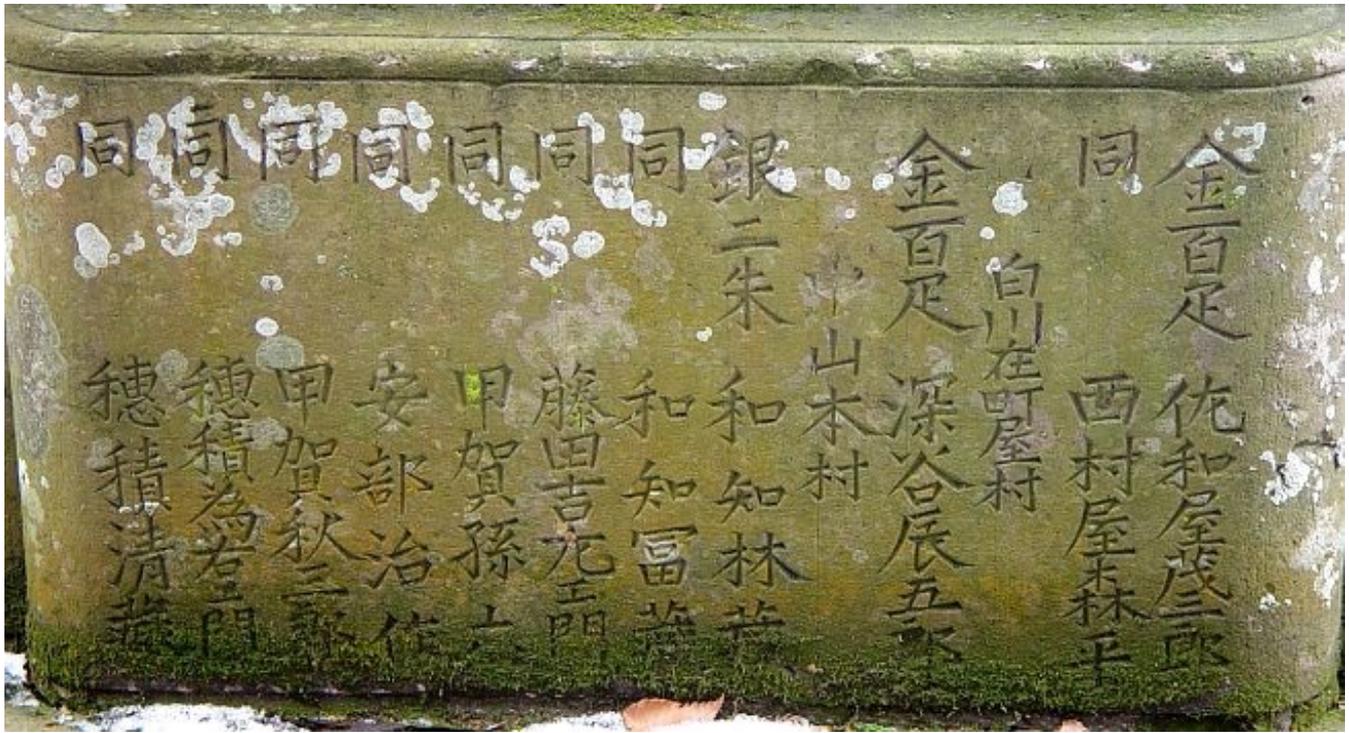
子獅子の表情がすばらしい。この詩情豊かな表現力は孫弟子の和平へと受け継がれた



↑阿像の尾。斬新なデザインだ



↑吽像の尾。阿像とデザインを変えている



↑台座には多くの奉納者、関係者の名前がはっきりと残っているが、石工の名前だけない。



烏峠稲

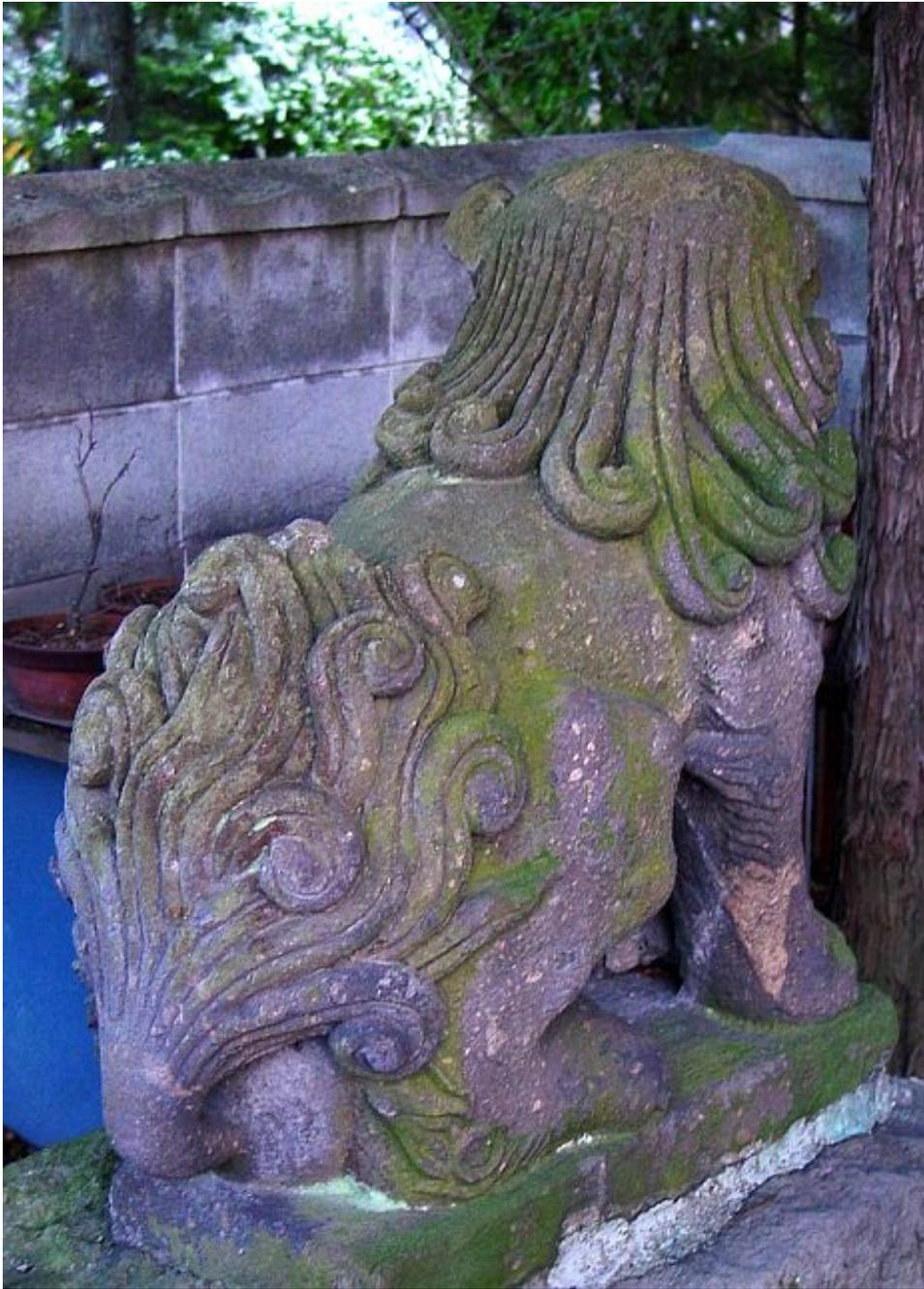
荷神社の狛犬（万延2=1861年）



烏峠稲荷神社の狛犬 阿像



旭宮神社の狛犬 吽像（建立年不明）



旭宮神社の狛犬 阿像の背中



旭宮神社の狛犬 阿像（鼻から下、顎までが取れてしまっている）



旭宮神社の狛犬 阿像の取れてしまった鼻



沢井八幡神社（石川郡石川町沢井）の波乗り兎像
（「天保14癸卯年（1843）8月15日 奉納 角田定右衛門」の銘）



もう一方の兎



左右で波のデザインを変えている



波乗り兎像を調べる日本参道狛犬研究会会長・三遊亭円丈師匠と案内をする地元石川町元助役・吉田利昭氏



取れてしまった耳を頭につけて建立当時の姿を想像する



上から見たところ



これ以上破損しないように、ていねいな管理を望みたい



すぐそばにある慶応元（1865）年建立の狛犬

台座に刻まれた「願主石工 菅田庄七」は石組み専門の石工であったとのことなので、狛犬本体は利平の工房で造られた可能性がある。